30 蕎麦の常識非常識

「参勤交代と転封」がそば文化を全国に拡散した

参勤交代は徳川家康が江戸に開幕（一六〇三年）してから、徳川慶喜の大政奉還（一八六七年）によって終焉を迎えるまで、二百六十五年も続いた徳川幕藩体制を象徴する大行事であったといってよいでしょう。

その原型は鎌倉・室町時代の守護大名の鎌倉・京都への集住に見られるのですが、下克上の流れの中で守護大名が次第に没落し、代わりに戦国大名が割拠するようになり、幕府の統制力が弱体化したのを再び中央に統合したのが豊臣秀吉であり、それ故に秀吉が参勤交代の元祖とされているのです。

もともと参勤は「まみえる・拝謁する」を意味する「参覲（さんきん）」と書くのが正しく、東西の諸侯が交代で上京し江戸幕府の将軍に拝謁することで服従を誓い、これに対し将軍が諸侯の領地所有を安堵するという幕藩体制の基本となる服属儀礼なのです。自然発生的ともいえるこの慣行を三代将軍家光が「武家諸法度」を改定し（一六三五年）正式に制度化したというのが経緯です。

西国大名が四月（譜代大名は六月）に江戸へ参府し、江戸に居た東国大名が国元へ帰り、翌年は東西が入れ替わる仕組みで、大名が国元に帰っている間は妻子を江戸に人質として残すという基本形が出来上がりました。（山本博文著「参勤

交代」）

「参覲」は世界各地に存在した極く一般的な服属儀礼ですが、江戸幕府のように隔年に行われるというのは世界に類例のない江戸時代独特の行事であるといわれています。参勤交代が大名の財政負担を多くして力を削ぐことが目的であったという俗説がありますが、これは誤りであるとするのが現在の通説です。

この制度によって徳川幕府の統治力が強力になったことは勿論のことですが、これまで京都を中心に上方に集中していた経済・文化が大きく変容することにもなったのです。

先ずは江戸の人口の急拡大です。参勤交代を行う大名達には江戸に領地と屋敷が与えられ、大名と共に多くの家臣が常駐することになりました。徳川直臣を加えると武家人口は約五十万人に達したといわれています。これに寛永年間には約十五万人、寛文年間には三十五万人、大化年間（十八世紀前半）にはほぼ五十万人に急増した町方の人口を加えると、総人口は実に百万人を超えることになったのです。そういった中で、徳川直参の旗本や各藩の大名・重臣達の交流が盛んになり、その受け皿として八百善・升屋などの高級料亭が生まれる一方、参勤交代で常駐する下級武士、都市建設に従事するために流入した職人たちの多くは独身者であったため、寿司・天婦羅・蕎麦・鰻の蒲焼などの外食産業が勃興し、世界でも稀にみる一極集中型の巨大消費都市が誕生したわけです。

それだけではありません。江戸に集まった大名達は隔年に江戸と領地の間を行列（最大は加賀藩の四千人）を組んで往復したのですから、五街道（東海道・中山道・奥州街道・日光街道・甲州街道）を中心に街道ネットワークが地方の隅々にまで整備され、街道には宿場が置かれ旅籠を初め茶屋や土産物屋等が立ち並び賑わいを見せるようになりました。江戸で誕生した様々な情報・商品・技術・文化等が地方に拡散するようになったことはいうまでもないことです。

かくして蕎麦打ちも、かつては地方では主に主婦の仕事でしたが、次第に蕎麦屋が誕生し貨幣経済の中に組み込まれていったのです。

参勤交代が全国大名（約二百六十藩）の財政に多大の負担をかけたことは事実ですが、次なる経済発展のための基盤の整備が進んだことは間違いありません。

また、江戸幕府による諸大名の統治は転封（移封）・改易によっても行われました。転封には恩賞的な加増転封、懲罰的な減封転封があり、御家断絶を意味する改易などを駆使して徳川幕府の統治機構の強化を図ったのです。

転封・改易を命じられた大名はその家臣全員（百姓は土着）を連れて他の地へ移動（改易は解散）をするのですから大変でした。集団移住は当然、政治・経済・生活の諸文化も人と共に移動することを意味します。蕎麦文化も転封によって各地に伝播しました。具体的な事例を紹介しましょう。

先ず頭に浮かぶのは会津藩初代藩主になった保科正之です。

正之は二代将軍秀忠の隠し子として信濃国高遠（たかとお）藩に預けられていましたが、異母兄に当たる三代将軍家光に見いだされ、その有能さを買われて高遠藩（三万石）を皮切りに、寛永十三年には出羽国山形藩（二十万石）へ栄進、続いて寛永二十年には陸奥国会津藩（二十三万石）へ上り詰めたのです。後に四代将軍家綱の後見役として幕閣にも加わり善政を行ったと語り継がれています。

その正之が高遠藩から山形藩〜会津藩へ転封する折に、正之を慕って行動を共にしたといわれる領民三千人の中には当然そば職人も加わっていました。現在でも会津に「高遠そば」の名が残っているのはその名残といえましょう。

寛永十五年（一六三八年）に鳥取藩、長州藩、広島藩へ睨みを利かせるため信州松本藩（七万石）から出雲松江藩（十八万六千石）へ国持ち大名として転封した松平直政の例や、松平忠昌が信濃国松代藩（十二万石）から越後高田藩主を経て越前国北の庄（福井）藩（五十万石）へ、千石政明が信濃国上田藩（六万石）から但馬国出石藩（五万八千石）へ転封された例などがあります。

蕎麦王国といわれた信濃国から他の地へ転封した藩主たちが移転先で新たなそば文化の華を咲かせ、現在も有数の蕎麦処（山形そば・会津そば・出雲そば・越前そば・出石そば）として繁栄していることを見ても、転封が単なる政権の移動に止まらず、職人・技術の移転を含めた広くは文化の移転（地域の活性化）が行われていたことを物語っています。

そういう意味で江戸時代は近代から現代に至る日本の制度的・精神的な骨格を作ったと言っても決して過言ではないと思われます。